

東西文明の比較(21)

▼世界最高の文明が隣りにあった▲

陽光新聞社・顧問 塩澤宏宣

四方を海に囲まれた列島に人類が移住してきたのが旧石器時代、3万年以上前のことといわれています。北海道から、沖縄・九州から、そして南方諸島から、海を渡って来たようです。

かれらは交流を続け、やがてひとつの文化を形成しました。縄文文化です。長い間続いた縄文文化は、やがて大陸からの移住民と交流を深めて弥生文化を築くことになりました。卑弥呼が魏と、倭の五王が宋と、それぞれに朝貢してきました。しかし、それによって「文明」に目覚めること

はなかったのではないかと思います。

遣隋使・遣唐使によって「文明」を知る

私は、この遣使の役割が、日本の歴史上大変大きな出来事だったと思っています。彼らが、今日の日本の礎を築いたと信じ、感謝しています。これから、しばらく遣使の功績に触れていきたいと思っています。

では、まず「隋」とはどのような国であったのでしょうか。「黄巾の乱」から405年ぶりで中国を統一した「隋」は、581年に建国され、618年に滅びました。わずか37年間の存命でした。

しかし「隋」は、それなりに実績を上げています。

初代の文帝は、新たな律令である開皇律令を制定しました。この律令は晒首・車折などの残酷な刑罰を廃し、律を簡素化してわかり易く改めました。後の唐律令はほぼこの開皇律令を踏襲したものです。官制にも大改革を加え、最高機関として尚書省・門下省・内史省を置き、尚書省の下に文書行政機関である六部、すなわち人事担当の吏部・財政担当の度支部・儀礼担当の礼部・軍政担当の兵部・法務担当の都官部・土木担当の工部の6つを設けまし

た。その下に実務機関である九寺、またこれとは別に監察機関である御史台を置きました。地方についてもそれまでの州>郡>県という区分をやめて、州>県の2段階に再編しました。そして文帝の治績の最大のものとして称えられるのが、科挙の設立です。南北朝時代では九品官人法により、官吏の任命権が貴族勢力の手に握られていましたが、科挙は地方豪族の世襲的任官ではなく実力試験の結果によって官吏の任用を決定するという極めて開明的な手段でした。これによって官吏任命権を皇帝の元へ取り返すことを狙ったものです。

このように文帝によって整備された諸制度は、ほとんどが後の唐に受け継がれ、唐朝274年の礎となりました。これらの文帝の治世をその元号を取って「開皇の治」と呼びます。大和朝廷による「大化の改新」の原点にもなりました。文帝の功績は、淮河と長江を結ぶ大運河を開削して補給路を確立しました。

高句麗遠征で、隋は滅亡

しかし、この運河の建設と相次ぐ高句麗遠征が隋を滅亡に導きます。611年、第二代皇帝の煬帝は、文帝がやりかけていた高句麗遠征を以後3度にわたって行ないました。612年から本格的に開始された高句麗遠征は113万人の兵士が徴兵される大規模なものでした。しかし1回目の遠征は大敗し、さらに兵糧不足もあって撤退します。613年の2回目の遠征は、煬帝自身が軍を率いて高句麗を攻めますが結果は得られず、614年に行なわれた3度目の遠征では高句麗側も疲弊していた事もあり恭順の意を示しましたが、煬帝が条件とした高句麗王の入朝は無視され、煬帝は4回目の遠征を計画します。

こうした煬帝の施政による度重なる負担に民衆は耐えかね、遂に第2次高句麗遠征からの撤兵の途中にかつて煬帝の側近楊素の息子楊玄感が反乱を起こして洛陽を攻撃。この反乱は、煬帝が派遣した隋軍によって鎮圧され、楊玄感は敗死しましたが、これを契機にして中国全土で反乱が起きました。

そして、これまで従属していた北方の突厥は、隋の衰退を見て再び北方で反乱を起こしました。煬帝は自ら軍を率いて北方に向かいましたが突厥軍に敗れて洛陽に撤退。この敗戦が更なる引き金となり、616年には反乱が各地でピーク状態に達し、やがて反乱軍の頭領は各地で群雄割拠しました。その中には、後の唐の高祖となる李淵も隋の太原留守として独立勢力を固めていました。

この反乱に対して煬帝は最初は鎮圧に努めましたが、その処理が反徒の殺戮政策という過酷なものだったため、かえって逆効果を招き、もはや隋軍では対処しきれなくなり、煬帝は江都に留まり、反乱鎮圧の指揮しました。しかし煬帝が南方に行幸した事は実質北方を放棄して逃走したも同じであり、遂に李淵により首都大興城までもが陥落しました。李淵は表面上は煬帝を尊んで太上皇とし、煬帝の孫楊侑を即位させました。

煬帝は次第に酒と宴会に溺れて国政を省みなくなり、遂には諫言や提言する臣下に対して殺戮で臨むようになって民心を失いました。煬帝に従って江都に赴いていた隋軍の多くは北方の出身者であり、彼らはそんな煬帝を見限り遂に重臣の宇文化及を擁立して618年に謀反を起こしました。この期に及んで酒色に溺れていた煬帝ですが、直属の群臣にまで叛かれた事で遂に観念し、縊り殺されました。

「唐」の誕生(初唐期)

江都にいた隋軍は宇文化及の主導の下に秦王楊浩を擁立し、北へと帰還することを望みましたが、途中で竇建徳の軍に大敗して消滅しました。煬帝の死を聞いた李淵は、楊侑から禅譲を受けて「唐」を建国しました。建国の時点では、依然として中国の各地に隋末に挙兵した群雄が多く残っていましたが、それを李淵(高祖)の次子李世民が討ち滅ぼしました。勲功を立てた李世民は、626年にクーデターを起こすと高祖の長男で皇太子の李建成を殺害し実権を握りました。高祖はその後退位して、

李世民が第2代の皇帝(太宗)になりました。太宗は北方の強国突厥を降してモンゴル高原を羈縻(きび=中国王朝が行なった周辺異民族に対する統御政策)支配下に置き、北族から天帝の号を贈られました。また内治においては三省六部、宰相の制度を確立し、その政治は「貞観の治」として有名です。その治世について書かれたものが「貞観政要」で、日本や朝鮮で帝王学の教科書として多く読まれていました。

唐の基礎を据えた太宗の治世の後、第3代高宗の時代に隋以来の懸案であった高句麗征伐が成功し、国勢は最初の絶頂期を迎えます。しかし、高宗個人は政治への意欲が薄く、やがて武后(則天武后)とその一族の武氏による専横が始まりました。夫に代わって専権を握った武則天は高宗の死後、実子を傀儡天子として相次いで改廃した後、690年の篡奪により国号を周(武周)と改めました。中国史上最初で最後の女帝であった武則天は、酷吏を使って恐怖政治を行う一方、新興富裕階層を取り込むため土地の併呑に許可を与え版籍の調査を緩めましたが、農民の逃散や隠田の増加が進行して社会不安と税収減及び均田制の綻びを招きました。

武則天が老境に入って床にあることが多くなると権威は衰え、705年、宰相の張柬之ちやうかんしに退位を迫られました。そこで武則天が退位させた息子の中宗が再び帝位に返り咲き、周は1代15年で滅亡しました。しかし今度は、中宗の皇后韋氏が中宗を毒殺。韋后はその後即位した煬帝を傀儡とした後、篡奪を画策しましたが、中宗の甥李隆と武則天の娘太平公主の蜂起により敗れた韋后は殺され、武則天が廃位させた李隆基の父・睿宋が再び帝位につき、李隆基はこの功により皇太子の地位に就きました。その後、今度は李隆基と太平公主による争いが起きます。7世紀後半から8世紀前半にかけて後宮から発生した政乱を2人の皇后の姓を取って「武韋の禍」と呼びます。

しばらく「唐史」を続けたいと思います。